

令和 4 年

理事長挨拶

塩原カントリークラブ
理事長 渡邊 勇雄



選手の心に残るコース整備と歓迎を。10月の「いちご一会とちぎ国体」。
5月には関東倶楽部対抗予選も。

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては良いお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

旧年中は格別のご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。

今年の10月はいよいよ「いちご一会とちぎ国体」が開催されます。また、5月には関東倶楽部対抗男子栃木予選会場として開催が決定致しました。

一昨年より競技開催コースである北・南コースを中心にコース整備を積極的に行い、コース委員会が率先してコース整備ボランティアを募り、定期的にグリーン内の除草やコース内にある石の除去等行っていたいただき感謝致しているところでございます。コースコンディションも徐々に良くなってきており、競技大会を通じて県内並びに全国から来場されるプレーヤーの皆様にとって心に残るコースになるよう期待しております。

現在、競技開催コースを中心にコース整備に注力しておりますが、中コースにおきましても裸地の改修等、徐々に手を加えておりますので、会員の皆様が満足戴けるコース作りを目指してコース整備を行ってまいります。

現在、猛威を振っていた新型コロナウイルス感染は徐々に減少傾向にありますが、気を緩めることなく引き続き安全面に留意しゴルフ場運営を行ってまいりますので、会員の皆様におかれましてはご家族、ご友人をお誘い合せの上、ご来場戴きますようお願い申し上げます。

末筆となりましたが、会員の皆様とご家族のご健康、ご繁栄を祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



早くも練習ラウンドの予約第一号。新潟県選手団が 4 日間。

予約のトップを切ったのは新潟県で、3 月に 4 日間の練習ラウンドが予定されている。同県は雪が多く、本番コースの春到来を待って、コースに慣れるのと、技術向上を目指しているとみられる。

国体のほか 5 月には、関東倶楽部対抗の男子県予選が開催されるため、コースの緑が深まるにつれて、男女ともアマ上位者のプレーで、例年になく活気あふれる光景が繰り広げられそうだ。

裸地解消などコース整備に“合格点”。JGAのコース視察で。

国体の試合に使用される北、南コースについて、JGA(日本ゴルフ連盟)の視察が昨年 12 月 16 日に行われ、全体的に“合格点”をもらった。

この視察には、県ゴルフ連盟の担当者も同行、18 ホールのグリーン周りを重点的に見分した。一昨年まではグリーン周りに裸地が目立ち、コース関係者も対策に頭を悩ませたが、昨年初めの実験植栽で、高麗芝をベント芝に代えることで解消できることが実証され、全グリーンの周辺や松の日陰部分でこれを実行した。

JGA担当者は以前の裸地状態を見ておらず、現況については特別な指摘はなかったが、以前の状況を知る県連盟担当者からは「格段に改善されて、これならプレーの際にも気にならない」と太鼓判を押してもらった。

裸地解消に力を尽くしたコース管理関係者やボランティアでコース整備を続けているコース委員会の有志も「苦労のかいがあった」と胸を張っている。



高麗芝からベント芝へ
張替え



肥培管理により
健全な芝に



刈込頻度を上げ
良好に



枯れ松の伐採処理を急ぐ。国体コースで 100 本超。

コース管理では冬季を通して松食い虫にやられた松の古木の伐採処理に全力をあげている。伐採本数はゆうに 100 本を超えているという。

各コースの外周、ホールを隔てる赤松の古木は塩原カントリークラブが誇る風景であり、名物でもあった。この 10 数年、薬剤散布など対策に全力をあげてきたが、被害の深刻度は増すばかり。

枯死した古木を伐採して撤去する意外に手だてではなく、毎年、それが続けられている。今冬は国体で使う北、南コースを重点的に処理している。以前のどっしりとした雰囲気が出たホールや、突然、明るい空が見渡せるようになったホールもある。中にはどうしても邪魔に見えた松がなくなったと喜ぶプレーヤーも出るかも知れない。

松くい虫の被害で、変色しまった松



画面中央



画面中央奥



塩原カントリークラブ！攻略編！！【中コース】 — 中里 鉄也プロ —

☆ 中コース 2 番 ☆



【コース解説】

平坦なショートホール！

【中里プロからのアドバイス】

ティーショットは、グリーン左手前。右側にバンカーが有る為、正確なショットが必要になる。
外すのであれば、グリーン手前か左バンカー奥に外したい。
グリーンは左から多少の傾斜が有るので、強弱に気を付けたい。



次回は、中コース 3 番を紹介します！！



那須の小天狗——小針春芳伝⑬

井上 安正

海外での戦いで、小針春芳が悔しい思いをさせられたのは 1962(昭和37)年のシンガポールオープンだった。八分通り勝てたと思ったのに、勝利にスルリと逃げられてしまった。

初日からトップを守って迎えた最終日だった。コースはパー73、小針は69、73、72の8アンダーで単独トップ。小針を追うのは、まだ無名のウイルケス(南アフリカ)で2打差でスタートした。バック9を残して4打差に広がった。それで、安心したわけではないが38と乱れてしまった。ウイルケスは33と爆発し、逆転を許してしまった。

「この試合はほんとに残念で仕方がなかった。外国の選手は、無名でもとんでもないスコアを出す。日本人と違うと思い知らされた」。新聞は「よくやった。日本のゴルフの評価を高めた」と伝えてくれたが、小針はホゾをかむばかりだった。これに勝てば、海外初優勝だったはずで、小針にとって終生の悔しい思い出となった。

当時、海外遠征では、まとまった現金を持参した覚えがあまりない。一緒に行ったプロゴルファーもおしなべてそうだったように思う。外貨に換金して持ち出すのが不自由で、プロゴルフ協会が政府ルート通じて、海外の企業や団体に支援を要請してあるという話があった。現地では、日本人会や駐在している商社がなにくれと面倒を見てくれた。裏では大使館や領事館が、調整を図ってくれているようだった。

在留の日本人にしてみれば、故国からやってきた選手が、大きな外国人選手と渡り合う姿は、誇らしくもあり、応援せずにはいられなかったのだろう。とくに、1958(昭和33)年のカナダオープンでは、小針、小野とも、日本人会のゴルファーがキャディーを買って出してくれ、バックをかついでもらった。トーナメントのエントリー代、ホテルの宿泊代まで、ほとんど日本人会が負担してくれた。小針は今の若い選手の海外での活躍が報じられるたびに、同胞選手の世話を駆け回ってくれた、日本人会の人々に思いをはせて目頭に熱い物を感じた。

1964(昭和39年)5月、枚方カントリー倶楽部(大阪・枚方市)で第32回日本プロゴルフ選手権が開かれた。予選ラウンド第一日目で霞ヶ関カントリー倶楽部の竹間政雄は小針、戸田藤一郎と同じ組になった。

小針はスタート前、竹間にこうささやいた。

「今日は戸田さんのゴルフを見て、何かを盗んでやろうと思っている。お前さんもそうした方がいいよ」。戸田は日本プロの連覇経験者で、パンチショットの名手だった。強い西風が吹くこの日は、そのショットが功を奏すはず。小針は近くでそれを見極めたかった。

戸田は日本プロだけでも4勝し、ちょうど50歳だった。小針は日本オープン2勝、43歳、竹間は31歳でメジャーは未勝利。竹間は小針から出た言葉で、自分の心の置き所の甘さを恥じた。ホールごとに、戸田のスイングとボールの軌道を凝視した。スタート前の小針のささやきが頭から離れなくなってしまった。

戸田のアイアンのキレと正確性に舌を巻いた。5番アイアンでも、左右にぶれることはない。ズレは前後、すなわちピンの先に落ちるか、手前に落ちるかだけだった。小針は淡々としたいつものプレーぶりながら、戸田の一挙手一投足も見逃すまいと目線を走らせているのがわかった。

小針と同じように戸田のプレーを観察しながらでは、竹間にとっては荷が重かった。抑えようとすればするほど、ショットが暴れてしまった。初日を終わって、恥ずかしながら80を切れなかった。



次の日の第2ラウンドのスタート前。竹間は戸田からアドバイスをもらった。「オレと小針を気にし過ぎているよ。そんなに気にせずに、自分のゴルフをやってみな」。小針の「戸田さんをよく見ろ」という言葉をかなぐり捨てることにした。やっと69に収まり、「真ん中くらいのスコアで」、予選を通ることが出来た。

竹間は戸田に胸の内を見透かされ、「これが出来なければ、一流のプロとは言えないのだ」と恐縮した。それ以上に、小針が不惑の年を超えても、七つ年上の戸田から何かを盗み取ろうとしたその探求心、向上心の強さに心を打たれた。あくまでも「うまくなりたい」、「強くなりたい」とゴルフの真髄を求める続ける鬼気のようなものさえ感じた。この大会では、橘田規が前年に続いて連覇した。連覇は、ラリー・モンテス、戸田藤一郎、林由郎、中村寅吉に次いで5人目だった。

竹間正雄には小針春芳との思い出深い試合がもうひとつある。1966(昭和41)年4月に名古屋ゴルフ倶楽部和合コースで開かれた第7回中日クラウンズである。日本初の民間ゴルフトーナメントとしてスタート、この年から「全日本アマプロ選抜中日クラウンズ・ゴルフトーナメント」と名前を変え、賞金総額も210万円から800万円に、優勝賞金も50万円から120万円にアップされた。

3日間大会の初日は絶好のコンディションで参加81人(アマ22人)が総じてスコアを伸ばした。初出場で関東の若手と注目された竹間が2番(パー5)で2オンに成功、8杯のイーグルパットをねじ込むなど、66のベストスコアで、単独トップに立った。

第2ラウンドの午後になると、17番のバンカーショットでミスし、ダブルボギーとするなど、午前中より9打も多い75をたたき急落した。一方、藤井義将、小針春芳、内田繁が橘田規の持つコースレコードタイの65をマークする猛チャージを見せた。

過去6回のこの大会で、3位2回、5、6位各1回で、優勝が悲願でもあった小針は、最終日69をマークした。しかし、優勝した内田に追いつけず、橘田と2位を分けた。自分のスコアの急降下、小針先輩の無念と、竹間にとって忘れられない試合だった。

栃木・宇都宮市に大島富五郎という元プロがいる。78歳。今は週3日は人工透析に通い、たまにクラブを握ることはあるが、ほとんどは自宅近くの公民館で碁を打ち、悠々自適の日々を送る。大島は栃木県立今市高校を卒業し、生まれ故郷の栃木・藤原町(現日光市)にオープンした鬼怒川カントリークラブに就職、所属プロだった中村寅吉の弟子・藤井正五プロに習った。だから、中村の孫弟子を自認している。

高校時代は甲子園を目指す野球少年でキャプテンとしてチームをまとめた。今市高校の前身は旧制今市中学で、卒業生に作曲家・船村徹(本名・福田博郎)がいる。船村は「読売ジャイアンツのテストを受けた」と公言するほどの野球好きだったが、確かに今市高校の野球部OB名簿には、大島の八つ先輩の欄に「福田博郎」の名前がある。

静岡・御殿場の富士小山ゴルフ倶楽部で修業を重ね4年でプロ資格を取った。当時、シード制はなく、月例競技会の成績によって、公式競技会への出場資格が与えられた。月例会は関東では3ブロックに分かれて開かれていた。栃木、群馬、茨城、千葉県がAブロックとされた。

大島はいくつかニックネームがあったが、「親分」はその名前の語感からついた。「月例男」は、優勝は少なかったかもしれないが、常に上位に顔を出していたから。「ミスター・ホールインワン」は、44歳までに15回を数えたからだった。「ショートゲームチャンピオン」というのもある。



1966(昭和41)年の第31回日本オープン(千葉・袖ヶ浦カンツリークラブ)に初出場を果たした。直近のブロック大会の優勝者として出場権を得た。3日間大会で最終日の決勝は、36ホールを戦う長丁場だった。初日は70、2日目はイーグルもあって、69で回ってトップに立った。その2日目は小針春芳、石井朝夫と回った。「大島君、栃木出身だって」。「はい、静岡にいますが、栃木出身です。よろしくお願いします」。これが小針との最初の出会いで、初めて交わした言葉だった。穏やかな人だなと思ったら、大島の緊張感も和らいで行った。

石井は激しいプレースタイルで、プロ仲間でも定評があり、気迫で相手にプレッシャーをかけてくるタイプだった。若手に対しても「出る釘は打って鍛える」というのが身上だった。大島にもきつい言葉を投げた。次のホールへ向かう時、小針が近づいて来て、耳元でささやいてくれた。「大島君、石井が何か言い始めたら、おれの後ろに来てしまうといい……」。何を言われても聞き流してしまえと言われているようで、落ち着きを取り戻し、69でホールアウト出来た。心強い同郷の先輩と思えて、小針に対する大きな恩義を胸に刻んだ。

最終日、大島は佐藤精一、大先輩の戸田藤一郎との最終組だった。7番で大島のボールはグリーンからわずかにこぼれた。戸田のボールはカップについたのも同然の近さ。「ピッチエンドランで……」と心に決めながらグリーンに近づくと、ライン上に戸田のボールがある。

「当ててはまずい」。「マークしていただけますか」と言うと、「なに。これくらいのところを打てないのか」と戸田は応じる気配はない。「そのまま早く打て」と言われているように感じた。カップをねらうことより、戸田のボールに当てないようにという思いが、大島の頭の中をかすめた。時間をかけてねらったが、せかされているような気分になり、カップを大きくはずした。

それ以後スコアを乱し、結局、初の日本オープンは13位に終わった。優勝は地元の佐藤で12位までは賞金が出た。大島はそれを逃したが、翌年の7、8戦の出場権を得ることが出来た。この試合で大島が先輩から受けた仕打ちは、その頃まだゴルフ界に残っていた、若いプロに先輩が浴びせる洗礼でもあった。

大島は日本ツアー出場8回、ツアーの上位入賞5位3回、うち2回は予選トップだから、最終日最終組は3回経験している。残る1回は30位からで、栃木オープンは第1回と第6回に勝っている。大島が初の日本オープンで受けた恩義を小針に返す時は、ずいぶん後になってやってくる。

(つづく)



編集後記

年末から新年にかけ本格的な雪が 2 回降って、コース全体の雪解けはいつもの年より少し遅れるかもしれない。雪が多いというわけではないが、日中でも気温が 4,5℃までしか上がらない日が多く、氷点下の夜の多さと合わせて、温暖化の最中の低温被害とでもいえようか。しかし、国体に向けて練習日の予約が入るなど、コースには熱気が立ち始めている。早めに雪を溶かし、見事な緑の芽吹きをもたらしてくれるかもしれない。草萌える春の訪れが待ち遠しい。

井上 安正

